

# 『アナール』学派の形成と地域研究

田畑 久夫

## Formation of the “Annales” School and Regional Study

Hisao Tabata

The history advocated by French scholars of the “Annales” School played a central role in the reform movement of history in the 20<sup>th</sup> century. It is sometimes called ‘New History’ because it denied the main stream historical view of the 19<sup>th</sup> century which emphasized a political history alone, and tried to grasp total history including an economic history, a social history, a cultural history etc. For the same purpose it also encouraged exchange between history and geography which attached importance to regional study. In particular, two historians, L. Febvre and M. Bloch, who edited the bulletin of the “Annales” School, *« Annales d’histoire économique et sociale »*, were deeply interested in geography and introduced a geographical view into historical study. In this paper I first discussed the formation and development of the “Annales” School, paying special attention to its relations with geography. Next, I took up M. Bloch’s *« Les Caractères originaux de l’Histoire rurale française »*, analyzed and studied it because this book best shows geographical influence among the books on historical study. And I concluded that the methodology of the “Annales” School can effectively be applied to regional study by geographers.

### 1. 問題の所在

近年歴史学の研究において、フランスにおける『アナール』学派ほど大きな影響を与えた学派は存在しないといわれているように、『アナール』学派は歴史学研究に一大革新をもたらしたという高い評価が与えられている（竹岡, 1990 : i)。すなわち、『アナール』学派は、「新しい歴史」を提唱したものとして、わが国においても歴史学研究者は勿論のこと、社会学、経済学、人類学など関連諸科学分野の研究者間でも、非常に関心もたれ、注目されている。

かかる『アナール』学派と称されることにな

った学派が形成されたのは、後章において論じられるように、すべての社会学の総合たるべき歴史学を構築するという点にある。換言すれば、『アナール』学派の分析視覚は全体的な社会史を志向するというものである。ということは、とりわけ20世紀に入って以来その傾向が著しい、関連諸科学分野間での余りにも厳格な学問的な縄張り意識や、あるいは特定の科学分野間における極端な個別化・専門化に対して、明確に拒否することを意味する。すなわち、『アナール』学派は、社会的な事象に関して、種々の方面から研究アプローチが可能であることを認め、そ

これらの研究アプローチが堅固たる結合と収斂性をもつことにより、関連諸科学分野の総合が可能であると看做す立場であるといえる。<sup>1)</sup>

上述したように、『アナール』学派の歴史学は、歴史学者を筆頭に関連諸科学分野の研究者間でも多大の関心や注目がもたれたのであった。そのため、『アナール』学派に所属する研究者の著作（例えば、Braudel, F. 1994）が続々と翻訳紹介され、専門の研究者以外の一般の読者にも幅広く関心がもたれるようになった。<sup>2)</sup>

しかしながら、とはいうものの、わが国においては経済史を専門とする湯浅赳男（湯浅, 1998）など若干の研究者を除いて、『アナール』学派の方法論を駆使して実証的に分析した研究者はほとんど存在しない。かかる理由は、歴史学研究に限定していえば、『アナール』学派の初期のキーワード<sup>3)</sup>の1つである‘géohistoire’（ジオイストワール、地歴史学）については、わが国の歴史学界においては、地理的事象を歴史のファクターとして取り入れることに対する拒否反応が余りにも強い（湯浅, 1998: 478）からであるとされている。

本稿では、『アナール』学派および地理学とりわけフランス地理学の伝統とでもいうべき地域研究に論点を限定して、その諸問題を分析・検討する。上述したように、『アナール』学派と地理学とは深い関連が認められ、とりわけ、『アナール』学派の初期の研究には地理学的な観点が導入されているにもかかわらず、わが国で発表されたこれまでの地理学者による『アナール』学派に関する論攷は、ベーカ（Baker, A. R. H. 1982）、野澤秀樹（野澤, 1985）、谷岡武雄（谷岡, 2001）を除いて本格的に論じたものがないという学問的状况が存在するからである。つまり、『アナール』学派と地域研究に関する諸問題を分析・検討することにより、かような学問的状况を克服することを本稿の第一の

目的とし、次いで『アナール』学派による地域研究の事例を通して、地理学における地域研究の方法論的な指針を探ろうとするものである。<sup>4)</sup>

## 2. 『アナール』学派の成立とその背景

最初に本稿の主題である『アナール』学派という用語について説明を加えておきたい。というのは、前項でも指摘したように、『アナール』学派は、「新しい歴史」を提唱したと称されているが、その成立に関しては、歴史学プロパーの研究者によって提唱されたのではないなど、多少複雑な過程がみられる。さらに、かかる成立における多少複雑な過程と共に、成立後70余年を経過した現在において、『アナール』学派が目ざす研究対象に関しても、時代と共に変化が認められるという事実が存在するからである。

以上論じたような過程で、現在の『アナール』学派の歴史学が存在しているといえる。かかる点を考慮して、以下では『アナール』学派の成立とその背景を中心に論を進めていくことにする。

『アナール』学派とは、フランスで新しく成立した歴史学の一潮流のことを指すが、『アナール』（Annales）という一般的な名称（用語）によって、特定の歴史研究者集団を総称している、という際立った特色をもっている。<sup>5)</sup> このことから容易に推察されるように、『アナール』学派と称される歴史研究者の集団にとっては、『アナール』という名称がその学派の成立の原点となっているといえる。まずこの『アナール』という名称から検討していくことにしよう。

フランス語の『アナール』は、1年ごとに発行される学術雑誌のことをいい、一般には「年報」と訳されることが多い。つまり『アナール』学派とは、『アナール』誌に結集した社会・経

済・文化など多方面の歴史に関する研究に従事する研究者集団に対して、命名された名称である。ここで注目されるのは、『アナル』学派は、歴史研究を主体に行なう研究者集団であるが、歴史学プロパーの研究者ではなく、地理学・心理学・社会学を筆頭に、他の関連諸科学分野の研究者<sup>6)</sup>も、その創設当初から協力・関与しているという点である。

『アナル』誌は、フランス北東部のアルザス地方の中心都市であるストラスプールのストラスプール大学<sup>7)</sup>で、共に教鞭をとっていたリュシアン・フェーブルとマルク・ブロックの両名の歴史学研究者を中心に、大学の同僚である上述した関連諸科学分野の研究者の協力によって1929年に刊行された。『アナル』誌の正式名称は“Annales d'histoire économique et sociale”と称し、季刊の形式で発行された。<sup>8)</sup>

『アナル』誌が発行されるに至った理由、つまり『アナル』学派が形成されるようになったのは、次のような当時のヨーロッパなかならずフランスの歴史学研究者の研究動向の大きな反省の上に立脚しているといえる。すなわち、19世紀から20世紀初頭にかけてフランスに代表されるヨーロッパの歴史学研究は、歴史学の分野の中でも政治史的な事件を優先させる、いわゆる「事件史」が中心となっていた。<sup>9)</sup> (湯浅, 1985: 48)。

かような歴史学にみられる傾向は、21世紀に入った現在においてもみられないことはない。すなわち、現行の高等学校の日本史や世界史の歴史教科書の内容を検討すれば、かかる分野、つまり政治史を主体とする「事件史」が大きな比重を占めていることが指摘できる。

具体的にいえば、当時のヨーロッパにおいては民族国家の成立が相次いだ結果、それに付随する形で、領土や国境の変遷あるいは王朝など支配者の交代、すなわち政治史が歴史学の主

要なテーマとなっていたのであった。かかる点に関して、『アナル』誌創刊の中心的人物の1人であるマルク・ブロックは、遺著<sup>10)</sup>の中の1冊『歴史のための弁明－歴史家の仕事』(Bloch, M. 1949)で、実証主義歴史家たちは、

他の研究者たち(実証主義歴史家のこと一筆者註)は、同じ頃、全くちがった態度をえらんだ。歴史を物理学的遵法主義の枠の中にはめ込むことに成功せず、かつまた彼らの最初の教育によって、史料批判の困難や疑惑や頻繁な繰返しに特に心を奪われたので、彼らはこういう証明の中に、何よりもまず迷いからさめた謙讓の教訓を汲みとった。彼らがその才能を捧げようとする学科は、けっきょく現在においては、たしかな結論を、将来においては、進歩の多くの見込みを、もっていない。彼らはこの学科を、真に科学的な知識よりもむしろ一種の知的な遊戯、あるいは少なくとも、精神の健康に適する一種の偉生訓練と見る傾向があった。人はときおり彼らを“historiens historisants”(歴史屋)と名づけた(讚井訳, 1956: X VII-X VIII)。

と論じた。

さらに、実証主義歴史家たちが、古文書と称される文献史料だけで研究を行なうのに対して、マルク・ブロックは「歴史的証拠はほとんど無限に種々雑多である」(讚井訳, 1956: 47)と述べ、文献史料以外にも地理学、考古学、美術史、古銭学など多方面の資料にも依頼すべきであると主張した。かかるマルク・ブロックの歴史観は、歴史は有効である<sup>11)</sup>と強く言い張ることと並んで、現在の歴史学研究にも通じる先駆的な見解であるといえよう。<sup>12)</sup>

以上のような実証主義歴史学の特徴を踏まえたうえで、『アナル』学派は、歴史研究を人間生活の中に、政治史という特定の1つの領域に特権的な地位を与えるのではなく、種々の歴

史領域をトータル（全体）で視野に入れて研究に従事するという、全体的な歴史を目ざそうとしていたといえる。

すなわち、研究者の世代観や、研究者個人の問題意識や方法に関して完全に一致しない面が存在するものの、次のような目標がかかけられた（二宮，1980，竹岡，1990：20～25など）。その第1点は、歴史における人間科学と称されることもある人文・社会科学の統合を主張した。つまりこのことは、人間科学に所属する歴史学、経済学、社会学、地理学などの研究者を分かち、さらには歴史学の内部においても、個々の歴史学研究者たちを、例えば、経済史、政治史、文化史などのそれぞれの部門領域に隔離した専門精神、いわゆる「たこつぼ」的研究と称せられるような研究を、きっぱりと否定することを意味した。換言すれば、学際的な研究（interdisciplinary study）に従事しようとする立場である。そのために、『アナル』学派の機関誌である『アナル』誌は、リュシアン・フェーブルとマルク・ブロックの両宰者の下に、編集委員として専門とする時代が異なる4人の歴史家の他に、地理学者、経済学者、政治学者が各々1名ずつ加わった。<sup>13)</sup> 第2点は、第1点でかけた学際的な研究に関して、方法論あるいは理論的な論考ではなく、事例と事実によって論証しようとしたことがあげられる。

以上の2点を歴史叙述として具体化するために活用した手法は、①自然的背景への目くばり、②比較の方法の重視、③「事件」よりも「構造」の重視の3点であった（湯浅，1985：48-59）。すなわち、①の自然的背景への目くばりとは、『アナル』学派の歴史学が上述したように、種々の歴史領域をトータル（全体）で視野に入れようとするかぎり、その主要な研究対象は文化あるいは文明というものにならざるを得ない。これら文化あるいは文明の理解にとっては自

然的な背景の分析を切り離して論述することができない。フェルナン・ブローデルの主著の1冊『地中海』（Braudel, F. 1949）はⅢ部から構成されている大著であるが、その第Ⅰ部のテーマは「環境の役割」となっており、地中海をとりまく地域の地形や海洋、気候などの自然環境（milieu physique）が主体にヴィヴィッドに記述されている。といっても『地中海』において、人々の生活が環境（主として自然環境）によって左右されるという環境決定論（determinism と呼ばれる）の立場に立脚しているのではなく、環境は人間の技術力で克服できるとする環境可能論（possibilism と称される）に近い立場で貫かれているという特色がみられる。

周知のように、前者の環境決定論はドイツの著名な地理学者フレードリッヒ・ラッツェルがその主著（Ratzel, F. 1882. 1891）において展開した学説であり、そのラッツェル説に反論したのが、『アナル』誌の創刊に参加したアルベール・ドゥマンジョンの師にあたる、フランス地理学の祖と呼ばれているヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュで、彼の遺稿をまとめた著作『人文地理学原理』（Vidal de la Blach, P. 1922）の中で唱えた環境可能論であった。<sup>14)</sup>

②の比較の方法の重視というのは、『アナル』学派に所属する全員が重視している歴史叙述としての手法ではないが、トレイアン・ストイアノヴィチ（Stoianovich, T. 1976：125）によれば、かかる視座がベールに包まれたままの状態であったのが、マルク・ブロックによってみい出され、展開された。つまりマルク・ブロックにとっては、彼の歴史観において決定的に重要な方法論的指針となったのである。かかる点に関しては、その主著（Bloch, M. 1931）でも

かさね写真をつくる仕事のように、いつわって一般化した、人為的な、ぼやけたイメージをつくりあげることではなくて、比較対照

によって、共通の性格と同時に、独自性を取り出すことである。こうして、わが国民（フランス国民のこと—筆者註）史の流れの1つに捧げられたこの研究は、やはり比較研究につながるものである（河野・飯沼訳、1959：4-5）。

と述べられていることから確認できる。<sup>15)</sup> かようなマルク・ブロックによる比較の重視は、後章でも論証するように、地理学から入手したものと推察できる。

これに対して、③の「事件」よりも「構造」を重視するという観点は、『アナール』学派に属する研究者全員に流れる主要な観点といえる。例えば、フェルナン・ブローデルの場合でいえば、短期・中期・長期という3つの期間の異なった時間軸が設定され、それぞれの時間軸に対応した形成で構造が存在するというのである。彼の主著の1冊である『地中海』（Braudel, F. 1949）では、第I部「環境の役割」が5章より構成されているが、それぞれの各章が長期持続の世界をあつかっており、全体で長期の構造の解明がなされている。続く第II部「集団の運命と全体の動き」は8章で形成されており、第I部の長期の構造と、次の第III部の「出来事、政治、人口」というテーマで展開されている短期の構造との媒介的な役割を果たす中期の構造が論証されている。さらに最後の第III部では、前述したように短期の構造を論じているが、各章の内容は政治史の世界となっている。<sup>16)</sup>つまり、この第III部にみられるように、『アナール』学派は、既に指摘したように、全体の背景として政治史を否定する形式で出発したが、その本意は政治史を完全に否定するのではなく、全体の歴史の一部として当然政治史も必要であることを示している。

なお、本稿で論じている構造とは、竹岡敬温（竹岡、1990：77）が指摘しているように、社

会学者が使用している「ひとつの組織、堅密な結合、社会的現実と大衆の集合体との間の十分な固定した関係」ではなく、フェルナン・ブローデルが主張する「時間によってすり減されることが困難で、ひじょうに長い間、時間によって運ばれる現実」（井上編集・監訳、1885：26）を意味している。

以上3点にわたって『アナール』学派の手法について検討してきたが、大まかにいえば、①の自然的背景の目くばりは『アナール』学派の研究者の中でも、リュシアン・フェーブルがとくに提唱した手法であるといえる。同様に、②の比較の方法を重視するという立場は、マルク・ブロックの影響が強くみられる手法である。さらに、③の「事件」よりも「構造」を重視するという手法は、とりわけフェルナン・ブローデルがその大著『地中海』において論証した手法であるといえる。

### 3. 『アナール』学派の展開

前章で論じたような過程で『アナール』学派が形成されたのであった。しかし今日まで、『アナール』学派が形成されて以来長い年月が経過したことから、所属する研究者集団にも世代交代がみられる。そのためか、『アナール』学派に結集する研究者間においては、世代間によって関心度や立場が異なることとなった。すなわち、現在では『アナール』学派が形成されてから3世代が終了しつつあるとされる。

第1世代は、『アナール』誌の創刊に参加した研究者が中心の世代といえる。それ故、この世代の『アナール』学派の中心的な研究者は、『アナール』誌を共に主宰したリュシアン・フェーブルとマルク・ブロックである。以上から、この世代の『アナール』学派の特色は、『アナール』誌創刊号の論説にもっともよく示されていると思われる。

かかる点に関しては、1981年より『アナル』誌の編集委員を努めたアンドレ・ビュルギュール (Burguiere, A. 1979: 1351-1352) によると、『アナル』誌の創刊号の論説では、(a) 専門精神を打破し、学際性を促進し、人間諸科学の結合を助長すること、(b) 理論的な議論の段階から、現代史の領域での共同研究による具体的な成果の実現という、2つの目標をかかげたことによるという。つまり、このような目標が設定できたのは、以下に述べる3つの知的な学問上の系譜から引き継いだ結果であると断言する。その知的な学問上の系譜とは、①ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュとアルベール・ドマンジョンの地理学派、②アンリ・ベルによって創刊された『総合評論』の運動、③デュルケルム学派の社会学の3つである。

第2世代は、フェルナン・ブローデルに代表される世代である。フェルナン・ブローデルは1956年にリュシアン・フェーブルの死後『アナル』の主宰者兼編集者となった。<sup>17)</sup> フェルナン・ブローデルの特色は、歴史を全体的に把握するために、前述した大著『地中海』でみられたように、歴史を短期、中期、長期という時間の異なる3つの次元の3層構造としてとらえることであった。このことは、『地中海』の後に書かれた名著『物質文明、経済、資本主義、15-18世紀』(Braudel, F. 1979)においても、第1巻「日常性の構造」、第2巻「交換のはたらき」、第3巻「世界時間」という各巻にみられるテーマは、それぞれ物質文明、(市場) 経済、資本主義という15世紀から18世紀という長期構造の持続をあらわすものとなっているが、歴史を全体的に把握するという3層構造によって構成されている。このような立場を堅持するフェルナン・ブローデルの歴史観は、「方法論が先行するのではなく、まず直観的な関心が存在し、それが生みだした成果を彫琢する過程で、

その方法論的な吟味がなされたといつて大過がない」(湯浅, 1985: 59) とされる。

第3世代の『アナル』学派は、フェルナン・ブローデル後の『アナル』誌の編集を共同で担当した、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリー、ジャック・ル・ゴフ、マルク・フェローの3名が中心であるといえる。この世代は、前の第2世代がフェルナン・ブローデルのもとに多数の研究者が結集したのとは異なり、これまで以上に『アナル』学派に所属する研究者の関心度や立場に相違がみられることが多かった。しかしながら、イヴ・ラコストによれば第3世代の特色は、イデオロギー的・方法論的なある種の折衷と2つの指向性によって特色づけられることになる(尾河訳, 2003: 74)。すなわち、その特色をもっともよく示しているのは、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリーの主著に代表される歴史人類学的な研究(樺山他訳, 1980)と、ジャック・ル・ゴフの代表作にみられる心性に関する歴史研究(新倉訳, 1979など)である。なお、上述の3名の中心的研究者のうち、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリーとジャック・ル・ゴフの両名は、初期にはマルクス主義的な立場をとっていたが、『アナル』誌に関連するところから共にマルクス主義に距離をおいたとされる。<sup>18)</sup>

このように『アナル』学派の歴史研究は、各世代においてはそれぞれ関心度や立場が異なるという特色がみられた。<sup>19)</sup> 以下では、本稿の主題である地域研究ととくに深い関連を有したのが第1世代の研究者であるので、この世代に限定して地域研究との関連を中心に、論を展開していくことにする。

前述のように、『アナル』学派の第1世代の中心的な役割を果たしたのは、リュシアン・フェーブルとマルク・ブロックである。最初にリュシアン・フェーブルの特色から検討してい

く。

リュシアン・フェーブは、大著『大地と人類の進化—歴史への地理学的序論』(Febvre, L. 1922)が第2次世界大戦(1939-1941年)中の1941年に前半部だけが文庫版(岩波文庫)の一冊として翻訳されたこともあり、地理学に詳しい歴史家として、わが国の地理学研究者間では比較的知られていた(谷岡, 2001:22)。このように、リュシアン・フェーブが地理学に大変精通していたのは、地理的空間を歴史研究の重要な研究対象と看做すという、20世紀フランス歴史学の1つの伝統を築いた点にあるとされる(竹岡, 1990:7-8)。かように、リュシアン・フェーブが地理学に非常に深い関心をいだくようになったのは、学生時代にエコール・ノルマル・シュペリール<sup>20)</sup>(高等師範学校)の教授で後にソルボンヌ大学の教授となった、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュの影響を受けたからである。<sup>21)</sup>この点に関して、リュシアン・フェーブの歴史観を研究したハンス・ディーター・マンは、その著作(Man, H-D.:1972)の中で、次の2点を指摘している。

第1点は、リュシアン・フェーブが19世紀フランス最大の歴史家と称されているジュール・ミシュレを大変尊敬していたが、そのジュール・ミシュレの観点は、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュの地理学的手法に非常に近いことを知ったことに起因すると推察している。すなわち、リュシアン・フェーブは、ジュール・ミシュレの人間の生活の土台とでもいべき土地を配慮した歴史、現在でいえば地域史に該当する歴史、つまり「地理なくして歴史なし」という分析視角を、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュの主張する「歴史なくして、地理なし」という歴史を重視する人文地理学の中に発見したからである。

第2点は、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュ

がその遺稿『人文地理学原理』の中で提唱した「地的統一」(unité terrestre)と「環境」(飯塚改訳上巻1970:44-49)という2つの原理の中に、後に『アナル』学派の研究者によって主張されていく全体史の構想をみたことである。ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュは、かかる概念を地域研究者によって具体的に展開していったのである。

以上のように、リュシアン・フェーブが非常に強い関心を抱いたヴァイダル流の地理学は、その後次のような発展がみられ、それが『アナル』学派の歴史研究にも大きな影響を与えることになった。すなわち、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュに指導されたフランス地理学派による研究は、産業・人口・集落などという個々の地理学の専門分野とは別に、各研究者がフランス国内および外国において、それぞれ特定の地域を設定し、その特定地域の地域研究を行なうことが伝統となった。そして、各々の研究者の特定地域の地域研究が、例えば、集落地理学を専門とする前述のアルベール・ドマンジョンのピカルデー平原に関する著作(Demangeon, A.:1905(1973))、農業および歴史地理学を専攻するジュール・シオンの東ノルマンディ地方の農民に関する著作(Sion, J.1909)、歴史地理学を主専攻とするロジュ・ディオンのロアール河谷地域に関する著述(Dion, R.1934(1978))などいずれもが学位論文として刊行されている。

さらに、リュシアン・フェーブは、アルベール・ドマンジョンと共著でライン川の経済史の諸問題をあつかった著作(Febvre, L.1935)を出版したり、『アナル』誌に地理学者の『アナル』学派への貢献を執筆(Febvre, L.1941)するなど、地理学者との交流に努めた。

一方、マルク・ブロックは、日本においては上述のリュシアン・フェーブほどその名前が知られていない(谷岡, 2001:24)。そこで、

とくに地理学との係わりを中心に彼の学問形成およびその展開を検討していくことにする。<sup>22)</sup> リシュアン・フェーブルの誕生より8年後の1878年に生まれたマルク・ブロックは、その経歴もリュシアン・フェーブルと同じようなコースを辿った。すなわち、マルク・ブロックもまたエコール・ノルマン・シュペリウールに入学した。父親が同校の古代史の教授であったからである。

エコール・ノルマン・シュペリウールでは、リュシアン・フェーブルと同様に、哲学者兼人類学者のリュシアン・レヴィ・ブリュルと言語学者のアントワヌ・メイエイの教えを受けたが、もっとも学問的な影響を受けたのは社会学者エミール・デュルケムであった。マルク・ブロックは、エミール・デュルケムが中心となって刊行していた《l'Année sociologique》(『社会学年報』)誌の大変熱心な読者であったからである。この雑誌は歴史の科学としての地位を再考することを基本的な姿勢としていた。当時エミール・デュルケムを総師とするこの学派は、社会学の種々の学問領域の観点やアプローチの方法を合流させるという方針を打ち出していた。かかる方法は、後の『アナール』学派にもつながる視角でもあった。

マルク・ブロックは、エコール・ノルマン・シュペリウールでの学問的修行の結果、中世史の専門家として成長していくのであるが、リュシアン・フェーブルと同様に、地理学なканずく歴史地理学に非常に興味を有していた。このことは、マルク・ブロックがそのベルリン大学での研究生活当時に最初にとり組んだ〈イール・ド・フランス〉<sup>23)</sup>に関する研究においても認められる。すなわち、その成果は、アンリ・ベルが主宰する『歴史総合評論』誌に掲載されたのであった(Bloch, M. 1912-1913)。その論文の冒頭部分で、封建制度に関心を有する法学者

と、近代における農村の所有地の変遷を研究する経済学者と、住民の話す方言について研究している言語学者の3者の異なった学問領域の研究者が、全員同じ境界線に立ちどまって調査・研究を行なうことが期待されるのは、3者間に地域という共通の土俵が存在するからである(Bloch, M. 1912: 209-210)と述べ、歴史研究における地域研究の重要性を唱えた。

その後、モンペリエやアミアンのリセ(中・高等学校)で歴史を教えることになった。また第1次世界大戦中には兵役についたこともあった。そして、かような経歴を経由して、1919年にストラスブール大学の助教授となった。

ストラスブール大学でのリュシアン・フェーブルとの共同研究は、1920年から1933年までの13年しか続かなかった。<sup>24)</sup>しかしこの期間は、『アナール』学派にとっては非常に重要な時期であった。当時、ストラスブール大学があるストラスブール自体、ドイツから返還されたばかりで、知的な革新にとむ場所であったことも、『アナール』学派にとっては最適の環境であった。そこで、マルク・ブロックは、社会学者モーリス・アルヴァクス、古代史家アンドレ・ピガニョル、フランス革命史家ジョルジュ・ルフェーブルなど高名な研究者と親交をもつと共に、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュの高弟の1人である、地理学者アンリ・ボリーグとも友情を深めた。このような親交や友情を通して、ストラスブール大学の学部を構成する多くの研究者たちが、リュシアン・フェーブルとマルク・ブロックがもつ知的関心を共有していたり、共有することになった。

かかるストラスブール大学で交流した研究者の1人アンドレ・ピガニョルの影響を多分に受けて出版したのが、大著『王の奇跡』(Bloch, M. 1924)である。その内容は、中世から18世紀にかけて、イギリスとフランスで広く流布し



ていたある種の病気に関する信仰についてである。この病気は、「王の災厄」として当時よく知られていた皮膚病の一種である頸部リンパ管の結核で、王が患者の患部に触れると治ると信じられていた。患者に触れるという、その儀式を行なった王は奇跡を起こすものとして、最高の政治権力者として崇められたのである。

同著は、ピーター・バークによれば次のような点において注目すべき書物であった（大津訳、1992：30-33）。第1は、本書の内容が中世というような通常用いられるひとつの歴史時代に限定されたものではなく、フェルナン・ブロードールが大著『地中海』などの中で力説する「長期持続の歴史」とでもいふべきものであった。

第2は、現在「心性」史と称される分野の草分け的な意味をもつ著作であった。つまり本書では、王が患者を治すという奇跡をもたらすという「集合幻想」を信じるに到ったかを、中心課題としていたからである。

第3は、本書があついている事例はイギリスおよびフランスが中心なのであるが、その他にポリネシアなどの地域の事例もとりあげられている。すなわち、本書では比較または比較史という用語がキーワードとなっている。この点は、マルク・ブロックの後の著作（例えば、Bloch, M. 1928 など）にも踏襲されている概念であり、地理学からの影響を受けたものと看做される。

以上のように、マルク・ブロックは、直接地理学者の指導を受けたことはないものの、大変地理学的な発想を身につけた研究者といえる。地理学との直接の関係は、ヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュとマルセル・デュボアの共同編集による《Annale de Géographie》（『地理学年報』）誌上に論文（Bloch, M. 1926）を投稿したことが最初で、その後地理学者の成果に関して、その書評を『アナル』誌（例えば、Bloch, M. 1929

など）で行なったりした。なお、マルク・ブロックの地理学への関心の中心は農村史あるいは農村地域であった。その地域研究の成果が次章で論じる『フランス農村史の基本性格』（Bloch, M. 1931）である。

かように、マルク・ブロックが隣接科学とくに地理学に接近するのは、古文書を中心とする文献史料のみに依存するのではなく、資料の領域を拡大するためであり、それによって歴史は有用であること（讚井訳、1956：iv）を証明することが必要であったからである、と推察できる。

#### 4. マルク・ブロックの『フランス農村史の基本性格』

本書は、序の中で述べられているように、ノルウェーの首都オスロの「比較文明研究所」に招かれて行なった講義を基礎にして書かれた。また本書は、翻訳者があとがき（河野・飯沼訳、1956：334）において述べているが、著者マルク・ブロックの名前を不朽ならしめたといわれているように、非常に高い評価が与えられている。最初に本書の概要を紹介しておこう。

本書は、著者の歴史研究に対する考え方を端的に論じた序と、農村史の具体的な研究に関する7つの章から構成されている。序では、次の2点が強調されている。

すなわち第1としては、「結局のところ、科学に関しては、すべての断定仮説にすぎないことが、常に認められるべきではないだろうか」（河野訳 1956：4）と歴史研究を含む諸科学の一般的な性格について論じる。そして、この観点を受けて、「ただ、限定された地誌的な範囲（下線—筆者註）のなかに慎重にとどまる研究だけが、最終的な解決にたいして実際に必要な史実を提供することができる」（河野・飯沼訳、1956：4）。

つまり、科学（この場合、とくに歴史研究が念頭に置かれている）における断定というのは、あくまでも仮説にすぎず、最終的な結論として受け入れることができない。しかしながら、上述の引用文中の下線部にみられるように、ある一定の限定された地誌的な範囲、すなわち地域を限定すれば、立派な歴史研究が行なえると提唱するのである。しかもその場合、フランスを一瞥することなくして、国内の各地域の特色をどうして把握できようか。さらに、フランスの動向は全ヨーロッパとの関連、つまり比較あるいは重層構造として、把握することが必要であることを強調する。

第2としては、歴史研究の方法として、「最も遠くへだたった事実が、同時に最もはっきりしない事実であることは、避けがたいことではなかろうか。だとすれば、最もよく知られたものから、それほどよく知られていないものへと向う必要をどうして避けることができようか」（河野・飯沼訳、1959：9）と述べているように、「逆行的方法」（*méthode regressive*）を唱えたことが指摘できる。かかる視角は、伝統的歴史学が「最も古いところから最も新しいところまで、一步一步たどってくる厳密に年代的な体系に忠実であった」（河野・飯沼訳、1959：9）に対応する形で「新しい歴史」の手法を提示することになった。<sup>25)</sup>

続く本論に該当する7つの章は、土地所有、農業生活、領主制、社会集団、農業革命などフランス農村史の特色を明確に示すものについて、詳細に分析・検討を加えている。その場合、フランスの農村史を、第1章が典型的なものであるが、起源と称する、ローマ・ゴールの時代から4・5世紀の民族大移動が開始され、定着農業がはじまった時代、大開墾と呼ぶ、11～13世紀にみられた耕地面積の拡大の時代、農業革命と名付けられた18・19世紀の技術的な進歩に

よる高度に集約的な土地利用の時代という3時期に分けて分析していくという特色がみられる。しかも、これらの3時期は、それぞれ独立しているのではなく、互いに重層つまり構造をもって展開していくことを論証している。

また、第2章「農業生活」の中の輪作タイプという節に代表されるように、最初に18世紀のフランス各地やイギリスあるいはインドシナ半島、マレー群島などの輪作体系の特色を論じた後、中世にみられた三圃式輪作、さらには古い耕作形態であるとされる二圃式輪作へと逆行的方法で、論が展開される。そして、この節の最後では、輪作体系を中心とする農地制度では、より古いとされる二圃式輪作を踏襲してきた南方タイプと、三圃制度が中心となっている北方タイプがみられる。すなわち、かような異なる2つのタイプが共存しているのが、フランスの農村生活のもっとも顕著な特性の1つであると結論づけている。

なお本書の巻末には、18枚にも及ぶ種々の耕地形態を中心とする図版が収録されている。このような例は当時出版された類書ではみられないもので、この点からもマルク・ブロックが地理学者の研究を充分にその視野に入れていたことがうかがわれる。このことは、本書の序に続く文献案内に、アルベール・ドマンジョンを筆頭とする10名近くの地理学者の地域研究が歴史学者の研究とともにあげられることから、傍証することができる。

以上からも容易に判明するように、本文の各章は地理学者が行なう地域研究と深く関連している。その中でも、地人相関と称される、自然環境なかんずく土地と人間との関係を重視してきた地理学ととくに関係が深い農地制度（河野・飯沼訳、1959：59-101）について、次に検討していくことにする。

マルク・ブロックは農地制度が三圃式輪作や

二圃式輪作に代表される耕作の循環方式のみに特徴づけられるのではなく、「技術的な手法と社会機構の原理との複雑な網の目を形成している」(河野・飯沼訳, 1959: 59)とし、かかる制度がフランスを地域ごとに分割する手法や原理の基盤となっている「農業文明」(河野・飯沼訳, 1959: 59)を形成するという。このことを、地理的な文脈に換言すると、農地制度によってフランスを地域区分することが可能であり、各々地域区分された領域がそれぞれ「農業文明」を形成するのである。

つまり、マルク・ブロックが提案する「農業文明」とは、農地制度など人間が自然環境(主として土地)に働きかけてきた行為を、地域類型化したものといえる。かかる概念は、野澤秀樹(野澤, 1988: 190)によれば、文明とは長い人間の歴史の中で、農地制度をはじめとする地表に刻み続けてきた人間的営為であると看做す、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュに代表されるフランス地理学派特有の文明概念の影響がみられるという。

マルク・ブロックが「農業文明」に代表されるように、文明という用語に注目するのは、上述のようにヴァイダル流の地理学の影響が認められるからであると推察できる。では具体的に、マルク・ブロックは文明という用語をどのように使用しているのでしょうか。マルク・ブロックの主張(河野・飯沼訳, 1959: 89-90)を整理すると次のようになる。

フランスなどヨーロッパにおいては、農地制度の対立が認められ、それが長い間歴史家の注意を引いてきた。その鍵を提供するものは、「民族精神」(Völkgeist)であると従来の歴史家は考えてきた。つまり換言すれば、民族<sup>26)</sup>ごとに各々の居住地とする地域が決まっていたのであった。しかしながら、マルク・ブロックは、この場合の民族にはケルト民族、ローマ民族、

ゲルマン民族、スラヴ民族など歴史的に確認できる民族しか考慮に入れられていないという誤りがあった、と指摘する。すなわち、そのような誤りを是正しようとするれば、フランスの農地の創設者である先史時代の名もなき住民もすべて考慮しなければならなくなる。現実にはそのようなことは不可能である。それ故、民族によって地域区分することは、民族という概念がいまいであることから、実際上はできないということになる。

したがって、自然的条件と人類の歴史の双方に緊密な関係をもつ農業の場合、上述の民族による区分ではなく、文明の諸類型としたほうがよいと提案するのである。さらに、このようなまとまりを地域区分と称さないのは、農地制度など農業にかかわりをもつあらゆる種類の現象が、正確に同一の地理的境界の中に収まらないのが農業の特色であるためだともいう。以上の議論を受けて、マルク・ブロックは、フランスの「農業文明」を3類型に区分する(河野・飯沼訳, 1959: 90-91)。

第1は、耕地の囲い込み制度が卓越している地域である。この地域は、19世紀まで続いていたやせた土地と弱い土地占有の型を示すのが特色とされる。分布はフランス全土にわたっている。

これに対して、他の2つは次の特徴が共通している。すなわち、緊密な土地占有の型を示す地域で、耕地の状況から判断すると、開放耕地である。また、穀物の収穫と家畜飼育のバランスがうまくとれており、それを維持するために、共同体規制が強固である。このタイプに所属する地域は、耕地形態と共同体規制の相違により、本文でも既に述べたのであるが、以下の2つに区分される。

そのうちの1つ(すなわち第2のタイプ)は北方型と称されるもので、耕地においては有輪

犁が使用され、共同体規制のとくに強固な地域である。また耕地は規則正しい短冊型の長方形をしており、三圃式輪作が卓越している。

他の1つ（すなわち第3のタイプ）は南方型と称されるもので、耕地では無輪犁が使用され、共同体規制は存在するが、北方型ほどとくに強固なものではない。また耕地は不規則な形態で、二圃式輪作が卓越している。

以上3つのタイプを簡単に要約すると、フランスの「農業文明」は、

- ① 囲い込み制度がみられる地域で、ほぼ全土に分布。
- ② 開放耕地のみられる地域で、共同体規制が強固に残っており、三圃式輪作が卓越する。北方に多く分布。
- ③ 開放耕地のみられる地域で、共同体規制が比較的弱く、二圃式輪作が卓越する。南方に多く分布。

というように、それぞれ異なった特色をもつ類型に区分できるといふ。

マルク・ブロックは、かような耕地形態や共同体規制にみられる習俗の地域的な対照こそが、フランス農村史の発展に関して、多大の影響を与えたものであると主張してやまない。この点こそが本書に一貫して流れているマルク・ブロックの歴史認識であるといえよう。

## 5. 結びにかえて

これまで『アナル』学派の形成過程を時系列的に分析・検討を加え、その問題点を指摘し、次いで『アナル』学派における地理学的手法の影響に関して、マルク・ブロックの業績を主体に論を展開してきた。その中でも、前者の『アナル』学派の第1世代を中心とする『アナル』学派の形成に比較的多くのページをさいたのは、文中でも述べたが、地理学研究者によるかかる方面での学問的蓄積が少ないことによる。

しかも、筆者の関心度が優先され、『アナル』学派の全内容を等しく紹介できなかった。この点は、収集した文献資料の限界もあり、了承していただきたく思う。

再度本論を要約する余裕はないが、地域研究との関連において、『アナル』学派の第1世代の主張を一言でいえば、〈géohistoire〉（ジオイストワール、地歴史学）の提唱だといっても過言ではない。しかし、本論の冒頭部分においても指摘したのであるが、日本の歴史学界においては、地理的なもの、例えば地域などを、歴史のファクターとすることに対する拒絶あるいは拒否反応が余りに強いものを感じる。そのためか、『アナル』学派の概要を紹介した書物は多数存在するが、『アナル』学派の立場あるいは方法論を導入した歴史書は意外と少ない。

本稿は、そのような学問的状况を克服・転換する目的で執筆した。今後、『アナル』学派の方法論を組み入れた具体的な地域研究を実施したく、考えている。

なお、フェルナン・ブローデルの大著『地中海』の初版（1946年）の序文では、上述の〈géographie〉という用語が消え去り、その代わり〈structure〉（構造）、〈conjecture〉（景況）という新しい用語が目立つようになった。この点に関しては今後検討しなければならないが、このことも、地理学研究者が『アナル』学派の歴史学を拒絶し、あるいは拒否するまでとはいわないが、『アナル』学派の歴史学に一定の距離をおく、原因の1つになっているのではないかと推察する。

それ故、本論で論じたように、『アナル』学派の歴史方法論を地理学とりわけ地域研究に導入しようとするれば、本論で展開したように、マルク・ブロック、リュシアン・フェーブルに代表される第1世代の研究者の方法論が受け入れやすいのではないかとと思われる。現在では、

『アナル』学派は第4世代に突入したといわれ、研究領域も更に細分されているが、再び『アナル』学派形成の統合ということで学際的研究を主張した原点に帰ることも必要ではないか。

一方、わが国の歴史研究者の多くが、地理学者と同様に『アナル』学派と一定の距離をおくのは、とりわけ第3世代以降の『アナル』学派に結集する研究者に明確に認められるのであるが、反マルクス主義的な立場をとるか、あるいはマルクス主義から転向した研究者が多いという点にある。この点は、比較的マルクス主義的な立場をとる研究者が目立つわが国の歴史学界の状況とは多少異なっている。そのため、『アナル』学派の歴史研究は、一部の研究者

を除いて積極的に評価する研究者が少なく、一定の距離をおく原因になっているのではないかと推察できる。

以上述べたような学問的な状況であるが、本論でもたびたび指摘したように、地理学者が行なう地域研究に関しては、とくに『アナル』学派の第1世代の研究業績が大いに参考になると思われる。

〔付記〕本稿は、平成15年6月に開催された昭和女子大学文化史学会平成15年度春季大会（於昭和女子大学）での口頭研究発表の内容を骨子とし、それに加筆修正を加えたものである。

## 註

- 1) かかる点からも、『アナル』学派の歴史観は、フランスの人類学者クロード・レヴィ・ストロースが主張する構造概念 (Lévy-Strauss, C. 1958) と大いに関連していると思われる。とくに『アナル』学派の第2世代を代表するフェルナン・ブローデルは、1935年から1937年までの約3ヶ年間ブラジルのサンパウロ大学で教鞭をとったが、そこで上記のクロード・レヴィ・ストロースと出会い、互いに交流を行なった。『アナル』学派と構造主義人類学が唱える構造概念については、他日、稿を改めて論じたい。
- 2) 例えば、まったく『アナル』学派の歴史学そのものではないが、網野善彦 (網野, 1997 など) が主張する社会史はこれに近い。
- 3) 周知のように、『アナル』学派は1950年代までは、関連諸科学分野の中でも地理学の影響が非常に濃厚であった。理由は『アナル』学派の初期の研究に指針を与えたのは、

地理学者ではないが地理学に大変造詣が深いマルク・ブロックの主著 (Bloch, M. 1931) にみられる環境および人間的空間の形成の観念という、地理的観点であった。そして、その集大成とでもいべきものが、フェルナン・ブローデルの大著 (Braudel, F. 1949) なのである。

その後、1970年までの20年間はフランスでは地理学よりも経済史のほうが学問的優位となった。『アナル』学派においてもかかる影響を受け、歴史研究もラブルースの物価史研究 (Labrousse, C-E. 1933) の流れをくむ経済成長や経済発展に関する内容をあつかうものが増加した。次いで1970年以降になると、『アナル』学派は人類学や社会学との接近を急に強め、ジャック・ル・ゴフ (Le Goff, J. 1977 など) に代表される心性史など新しい分野の開拓を行うとともに、社会習俗や文化システムの研究に学的関心が移行してきた。

- 4) なお筆者が『アナル』学派に関心をもつようになったのは、学生時代にわが国の地理学研究者では唯一であろうと推察されるが、元立命館大学総長谷岡武雄先生（当時立命館大学教授）から、直接『アナル』学派を代表する歴史家であるフェルナン・ブローデルに会ったことがあり、『アナル』誌に論文（Tanioka, T. 1959）を掲載してもらったことがあるという話を聞いたからである。
- その当時（1960年末）、わが国においては『アナル』学派のことはごく一部の歴史研究者が関心をもっているのみで、知れられておらず、関連する研究書や論文がほとんど入手できなかった。ちなみに、日本で『アナル』学派に関心をもたれ、注目されるようになったのは1970年代末から1980年代初頭にかけて、『アナル』学派の概要が専門雑誌などに紹介（例えば、井上, 1979. 山瀬・中村, 1979. 杉山, 1981. 本池, 1982. など）されだしてからである。
- 5) 特定の立場を主張する特定の歴史学的研究者の集団を、わが国の歴史学界では例えば『津田』史学というように、主張する代表者の名前を付与することがみられる。しかし、単なる一般的な名称で、その研究者集団名を総称する事例は存在しない。
- 6) 例えば、地理学者のアンリー・ボーリック、心理学者のシャル・ブロンデル、社会学者のモーリス・アルヴァクスなど。
- 7) ストラスブール大学は、第1次世界大戦（1914-1918年）終了後、ドイツからフランスに返還された。大学の創設は1621年で、化学者パスツールが大学で教鞭を取ったり、哲学者ヴィンデルバントが大学総長（1894-1900年）を務めたり、医者シュヴァイツァーが大学で学んだこともある名門大学である。
- 8) 『アナル』誌は、  
1929年、“Annale d'histoire économique et sociale”（『社会経済史年報』）  
1939-1941年、“Annale d'histoire sociale”（『社会史年報』）  
1942-1944年、“Mélanges d'histoire sociale”（『社会史論叢』）  
1945年“Annale d'histoire sociale”  
1946-1966年“Annale Economies Société Civilisation”（『年報－経済・社会・文明』）  
1997年－“Annale Histoires Sciences sociales”（『年報－歴史・社会科学』）  
と6回名称が変更されている。本稿では、煩雑さを避けるため、特別の場合を除いて『アナル』誌と統一して呼ぶことにする。
- なお、『アナル』誌に結集した研究者集団が『アナル』学派と称されることになったのは、厳密に言えば、1946年に新たに誕生した『アナル』誌に集まった研究集団に付けられた総称である（竹岡, 1990: 4）。
- 9) 当時の歴史学は実証主義歴史学と称された。シャルル・ヴィクトル・ラングロワとシャルル・セニョボスの共著（Langlois, C-V. et Seignobos, C. 1898）がかかる立場の基本図書とされた。
- 10) マルク・ブロックには遺著が他に1冊（Bloch, M. 1946）存在する。なお註17）でマルク・ブロックの生涯について少しふれた。
- 11) 周知のように、かかる点は、マルク・ブロックの遺著の1冊の序文が「パパ、歴史は何の役にたつの、さあ、僕に説明してちょうだい」（讚井訳, 1956: .）ではじまっていることから、推察できる。
- 12) 本文では割愛したが、実証主義歴史学に対して最初に意義を申し立てた1人にアンリ・ベルがいる。アンリ・ベルは1900年に“Revue de synthèse historique”（『歴史総合

評論』誌を創刊し、その主宰者となった。『アナル』誌創刊の中心的人物の1人であるリュシアン・フェーブルは早くからアンリ・ベルと懇意で、彼が企画した‘L'évolution de l'humanité, synthèse collective’（『人類の進化』叢書の第1巻）（Febvre, L. 1922）を執筆している。なお、アンリ・ベルの歴史観に関しては、井上幸治がその論文（井上, 1979: 2-15）の中で詳細に論じている。

13) 歴史学者は古代史専攻のアンドレ・ピガニョル、中世史専攻のジョルジュ・エスピナスとアンリ・ピレンヌ（ベルギーの歴史家）、近代史専攻のアンリ・オゼール、地理学者はアルベール・ドマンジョン、社会学者はモーリス・アルヴァクス、経済学者はシャルル・リスト、政治学者はアンドレ・シーグフリードで、いずれもそれぞれの学問分野において大変著名な研究者であった。

14) なお、フレドリッヒ・ラッツェルおよびヴァイダル・ド・ラ・ブラーシュの論点を詳しく紹介・要約し、さらに歴史と地理との関係を否定するどころか、重視したのがリュシアン・フェーブルの著作（Febvre, L. 1922）であった。すなわち、かかる点に関してリュシアン・フェーブルは、その著作の結論において、「われわれはその創世記に、闇が光と分かれはじめる時にいるにすぎない。歴大な労苦の将来がわれわれ歴史学者と地理学者に、無限の未来にわたって広がっている。窮屈な不毛なみすぼらしいちっぽけな体系に、怠情が独りよがりに感服して眠りこける時ではない」（田辺訳, 1971: 279）と論じていることから推定できる。

しかしながら、この点について、『アナル』学派との関係を大切にしている、パリ第8大学名誉教授である著名な地理学者イヴ・ラコストのインタビューによると、『アナル』学

派が、リュシアン・フェーブルと共に、地理学の力を殺ごうとしたと看做している〔尾河訳, 2000: 171〕。

15) 湯浅尠男によれば、比較史はマルク・ブロックに始まったものではなく、フランスに限っても、18世紀にはモンテスキュー、19世紀にはトクヴィルの著作の中においてもみられるが、比較史を方法論的に定式化したのは彼であるとする（湯浅, 1985: 52）。なお、マルク・ブロックには比較の方法を論じた好著（Bloch, M. 1963）が存在する。

16) フェルナン・ブローデル『地中海』の構成は次のようになっている（浜名訳, 1991 - 1995）。

#### 第I部 環境の役割

第1章 諸半島—山地, 高原, 平野

第2章 地中海の心臓部—海と沿岸地帯

第3章 地中海の境界, あるいは最大規模の地中海

第4章 自然の単位—気候と歴史

第5章 人間の単位—交通路と都市, 都市と交通路

#### 第II部 集団の運命と全体の動き

第1章 経済—この世紀の尺度

第2章 経済—貴金属, 貨幣, 価格

第3章 経済—商業と運輸

第4章 帝国

第5章 社会

第6章 文明

第7章 戦争の諸形態

第8章 結論にかえて—変動局面および経済情勢

#### 第III部 出来事, 政治, 人間

第1章 1550-1559年, 世界戦争の再開と終結

第2章 トルコの覇権の最後の6年, 1559-1565年

第3章 神聖同盟の始まり, 1566-1570年

第4章 レパントの戦い

第5章 スペイン・トルコ休戦協定, 1577-1584年

第6章 大きな歴史の外の地中海

結論

17) マルク・ブロックは、周知のように、対独レジスタンス運動のかどで、ドイツ軍によってリヨン市の北方約50キロメートルの通称レ・ルシユ原野の一角で、1944年6月16日銃殺された。

18) マルク・フェローは、マルクス主義者ではないが、ソ連史の専門家であると同時に、「新しい歴史」の創造を問う大著 (Ferro, M. 1981, 1985) を刊行している。

19) かかる点に関して、イギリスの歴史家ピーター・バークもその著『フランス歴史学革命 アナール学派 [1929-89年]』の中で、『アナール』学派の3つの世代 (段階と呼んでいる) の特色を以下のように要領よく整理している。

すなわち、第1段階では、運動は小規模で、急進的な転覆運動を繰り広げていた。それは、伝統的歴史学と政治史と事件史に対してゲリラ戦を戦っていた。第2段階では、『アナール』学派が歴史学の総本山を乗っ取った。つまりこの段階において運動は、構造と景況 (conjuncture) という他から区別される概念、および長期の変化が時系列に代表される他から区別される方法とを有する真の意味での学派となった。第3段階では、運動の中心を従来の社会=経済史的な分析から、社会=文化史の方向に転向する研究者が輩出してくるなど細分化が一層明確にあらわれてきた (大津訳, 1992: 3-4)。

なお、現在では『アナール』学派の研究者は第4世代に入っているとされる。しかし、

第4世代の研究者の関心度や立場は前世代よりも更に細分化しているように思われる。

20) この学校は全寮制で、学生は40名にも満たなかった。授業は講義形式ではなく、すべてゼミナール形式で行なわれた。リュシアン・フェーブルは、ここで、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの他に、哲学者アンリ・ベルグソン、哲学者兼人類学者リュシアン・レヴィ・ブリュル、芸術史家エミール・マール、言語学者アントワヌ・メイエなど、それぞれの学問分野で指導的役割を果たしている研究者から学んだ (大津訳, 1992: 21-23)。

21) そのため、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが唱える「環境可能論」的な立場から、ドイツの地理学者フレドリッヒ・ラッツェルが主張する「環境決定論」を攻撃したのであった。かかるリュシアン・フェーブルの影響を受けて、「環境可能論」的な立場より執筆されたのが本文で紹介したフェルナン・ブローデルの大著『地中海』の第I部「環境の役割」である。

22) 以下マルク・ブロックの略歴に関しては、遺著『歴史のための弁明—歴史家の仕事—』の解説 (讚井訳, 1956: 175-183) などを参考にした。

23) パリ盆地中央部にある地方。セヌ川とその支流が流れる、フランス王国発祥の地。もとカペー王朝 (987-1328年) の所領であった。

24) 1933年にはリュシアン・フェーブルがコレージュ・ド・フランスの教授に選ばれ、ストラスブール大学を去ることになった。またマルク・ブロックも3年後の1936年にソルボンヌ大学の教授に任命された。そのため、『アナール』誌もパリに拠点を置くようになった。

25) この点に関して、ピーター・バーク自著『フランス歴史学革命 アナール学派 [1929-89



年]』においては、イギリスの歴史学者フレデリック・ウイリアム・メートランドが1897年に出版した著作“Domesday Book and Beyond”で、既にこの方法を使用していることを述べている（大津訳、1992：40）。なおマルク・ブロックも、自らがこの方法を創案したとは断言していない。

この「逆行的方法」は、起点が現在に限定されるが、わが国の民俗学研究者が使用している研究方法である。

- 26) マルク・ブロックは、本文中において、人種と民族を同様の意味に用いている。それ故、本稿ではかかる混乱を避けるため、一般に称されるスラブ民族をスラブ人と称すなど民族という用語で統一した。

## 引用文献

網野善彦（1997）：『日本社会の歴史（上・中・下）』岩波書店（岩波新書）

Baker, A, R, H. (1982) : 'On the Relation of Historical Geography and the Annales School of History', 谷岡武雄・浮田典良：『歴史地理学プロシーディング』古今書院, 318-332

Burke, P. (1990) : "The French Historical Revolution : The Annales School 1929-89", Oxford, Polity Press. 大津真作訳（1992）：『フランス歴史学革命 アナル学派 [1929-89年]』岩波書店（New History）

Bloch, M. (1912-13) : <L' Ile de France : Les pays autour de Paris>, *Revue Synthèse historique* 25, 209-223 ; 310-339, 26, 131-199 ; 325-350.

Bloch, M. (1924) : <Les Rois thaumaturge, étude sur la caractère surnaturel attribué à la puissance royale, particulièrement en France et

en Angleterre>, Publication de la France des Lettres de Strasburg, Librairie Istra. 井上泰夫・渡邊昌美訳（1988）『王の奇跡 王権の超自然的性格に関する研究／特にフランスとイギリスの場合』刀水書院

Bloch, M. (1926) : <Une source peu connue d'histoire et de géographie rural ; les observations sur le projet de code rural du Premire Empire>, *Annales de Géographie* 35, 458-460

Bloch, M. (1928) : <Pour une histoire comparée des sociétés européennes>, *Revue de Synthèse historique*, dec, 15-50

Bloch, M. (1929) : <Economie française : monographie géographique>, *Annales d'histoire économique et sociale*, 43-51

Bloch, M. (1931) : <Les caractères originaux de l'histoire rural française>, Oslo, H. Aschehoug & Co., 河野健二・飯沼二郎訳（1959）：『フランス農村史の基本性格』創文社

Bloch, M. (1946) : <L'etrange défaite. témoignage écrit en 1940> société des Editions France-Tireur. 井上幸治訳（1970）：『奇妙な敗北—フランス抵抗史家の日記—』東京大学出版会（UP選書）

Bloch, M. (1949) : <Apologie pour l'histoire ou métier d'historien>, Paris, Armand Colin.

譜井鉄男訳（1956）：『歴史のための弁明—歴史家の仕事』岩波書店

Bloch, M. (1963) : <Mélanges historigues> tom 1, Pais Sege Fleury. 高橋清徳訳（1978）：『比較史の方法』創文社

Bloch, M. (1949) : <Méditerranée et la Monde méditerranéen à l'époque de philippe II>, Paris,

- Armand Colin. 浜名優美訳 (1991-95):『地中海』  
(5分冊) 藤原書店
- Braudel, F. (1958): 〈Histoire et Science, la longue durée〉 *Annales Économies Société Civilisations* 8, no4. 725-753
- Braudel, F. (1979): 《Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XV<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècles, tom 3; I. Les structures du quotidien, II. Les jeux de l'échang, III. Le temps du monde》, Paris, Armond Colin 村上光彦訳 (1985) 『日常性の構造 1・2』みすず書房, 山本淳一訳 (1986・88) 『交換のはたらき 1・2』みすず書房, 村上光彦訳 (1996, 1999) 『世界時間 1・2』みすず書房
- Charles-Victor Langlois et Charles Seignobos (1898): 《Introduction aux études historiques》, Paris, Hachette. 八本木浄訳 (1989): 『歴史学研究入門』校倉書房
- Demangeon, A. (1905,(1973)): 《La picardie et les régions voisines: artois-cambrésis-beaubais》, Paris, Almand Colin
- Dion, R. (1934,(1978)): 《La val de loire: étude de géographie régionale》, Marseille, Paris, Laffite Riprint
- Febvre, L. (1922): 《La terre et l'évolution humaine. Introduction géographique à l'histoire》, Paris, Renaissance du livre. 飯塚浩二・田辺裕訳 (1971, 72): 『大地と人類の進化—歴史への地理学的序論—上・下』岩波書店 (岩波文庫)
- Febvre, L. (1935): 《Le rhin: problème d'histoire et d'économie avec collection de A. Demangeon》, Paris, Almand Colin.
- Febvre, L. (1941): 〈Deux amies des annales: Jules Sion, Arbert Demageon〉, *Annales d'Histoire sociale* 3, 81-89
- Ferro, M. (1981): 《Comment on raconte l'histoire aux enfants travers le monde entire》, Paris, Payot. 大野一道訳 (1985): 『新しい世界史—全世界で子供に歴史をどう語っているか』新評論
- Ferro, M. (1985): 《L'histoire sous surveillance: science et conscience de l'histoire》, Paris, Calmann-Lévy. 井上幸治訳 (1987): 『監視下の歴史—歴史学と歴史意識—』新評論
- 井上幸治 (1979): 「アナル学派の成立基礎—フランス史学史におけるアンリ・ベルの位置—」『歴史評論』354, 2-15
- 井上幸治編集・監訳 (1989): 『フェルナン・ブローデル [1902～1985]』新評論
- Labrousse, C-E. (1933): 《Esquisse du mouvement des prix et des revenus en X V II siècle》(tom2) , Paris, Dalloz.
- Lacoste, Y. (2000): 「地理学とプロデル」. Flandrois, I(ed), 尾河直哉訳: 『「アナール」とは何か—進化をつづける「アナール」の100年』藤原書店, 165-191
- Le Goff, J. (1977): 〈Temp de l'église et temps de marchands〉 in Le Goff, J: 《Pour un autre moyen ge》, Paris, Gallimard. 新倉俊一訳 (1979): 「教会の時間と商人の時間」『思想』663, 40-60
- Le Roy Landurie, E. (1973, 1978): 《Le territoire de L'historien》(tom. I et II). 樺山絃一他訳 (2002): 『新しい歴史—歴史人類学への道—』(部分訳) 藤原書店
- Lévy Strauss, C. (1958): 《Anthropologie structurale》, Paris, Plon. 荒川幾男他訳 (1972): 「構造人類学」みすず書房
- Mann, H. D. (1972): 《Lucian Febvre: la pensée

vivante d'un historien : Paris, Almand Colin》

本池立 (1982) : 『『アナール』への道—フランス伝統的歴史学批判—』『思想』702, 14-30

二宮宏行 (1980) : 「歴史的思考とその位相—実証主義歴史学より全体性の歴史学へ—」『史学雑誌』89-5, 二宮宏行 (1986) : 『全体を見る恥と歴史家たち』木鐸社 17-58

野澤秀樹 (1985) : 「フランス地理学とアナール学派」『史淵』122, 野澤秀樹 (1988) : 『ヴィダル＝ド＝ラ＝ブラーシュ研究』地人書房 183-209

Ratzel, F. (1882, 1891) : “Anthropogeographie” (tom I; II) Stuttgart, J. Engelhorn,

Sion, J. (1909) : 《Les paysans de la Normandie orientale : pays de cauy, bray, vexin normand, vallée de la seine, étude géographique》, Paris, Almand Colin

Stoianovich, T. (1976) : “French Historical Method : The Annales Paradigm” New York, Cornell Univ. Press

杉山光信 (1981) : 「『社会学年報』から『経済社会史年報』へ—1920年代のマルク・ブロックとリュシアン・フェーブルー—」『思想』688 151-164

竹岡敬温 (1990) : 『『アナール』学派と社会史—「新しい歴史」へ向けて—』同文館

Tanioka, T. (1959) : 《Sythèmes agrires, le Jôri dans le Japon ancien》, *Annales, Economies Sociétés Civilisations*. 14<sup>e</sup> Année N 4, 24-36

谷岡武雄 (2001) : 「フランスにおけるアナール学派とフェンナン＝ブローデル」『人文地理』53-4, 21-38

湯浅赳男 (1998) : 『文明の歴史人類学—「アナール」・ブローデル・ウォーラステイン』新評論

湯浅赳男 (1989) : 『増補新版 文明の「血液」—貨幣から見た世界史』新評論

Vidal de la Blache, P. (1922) : 《Principes de géographie humaine, publiés d'après les manuscrits de l'auteur par Emmanuel de Martonne》, Paris, Armand Colin. 飯塚浩二訳 (1940, 改訂版 1971) : 『人文地理学原理 上・下』岩波書店 (岩波文庫)

山瀬善一・中村美幸 (1979) : 「フランス〈アナール〉学派の方法」『講座 西洋経済史』(第5巻) 同文館 98-128

受理年月日 平成 15 年 9 月 30 日

審査終了日 平成 15 年 11 月 6 日